

オブジェクション179

岡森 利幸

問題の源流

本編は、次の14項目からなる。

- ① 若者よ選挙に行くな
- ② 連合は民主党を見限るか
- ③ 学校で指導死
- ④ なぜ制服を着てこない
- ⑤ 世田谷区どろぼうの正体
- ⑥ タリウム毒殺事件の渦中の人
- ⑦ 猟銃所持者が激高したわけ
- ⑧ 自衛隊射撃場で銃を強奪しようとした候補生
- ⑨ バッティングケージを倒した野球部員たち
- ⑩ 「死にたいのなら、すぐに死になさい」と教示したA I
- ⑪ うな丼をしつかり食べた
- ⑫ 死亡退院が多すぎる精神科病院
- ⑬ 過大請求した大手旅行業者
- ⑭ 女子供の家庭を暴力支配した男

- ・ 文中敬称略。
- ・ 文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。
- ・ 以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用あるいは要約・意訳したもの。

① 若者よ選挙に行くな

【毎日新聞朝刊 2019/7/13 総合・社会】

東京のフリーライター・和田静香さんが投票率アップを目指し『選挙に行こう』の活動をしている。趣旨に賛同した漫画家やイラストレーターから200以上の作品が寄せられている。】

【毎日新聞夕刊 2019/8/10 社会】

「埼玉県民には……投票に行かせておけ!!」

埼玉県庁内に掲示された選挙啓発ポスター

漫画「翔んで埼玉」のキャラクターを起用している。】

【ユーチューブ「若者よ選挙に行くな」

お笑いジャーナリスト「たかまつなな」(26)が投稿

した動画「若者よ選挙に行くな」

動画の中で、老人たちが「若者よ選挙に行くな」と説教する。」

【毎日新聞夕刊2023/4/20 フィールド、の向こうに「Vote for the day」（その日のために投票を）一般社団法人「POW JAPAN」がSNSで投票を呼びかける。】

選挙に行くとか、行けとか言うのは、かなり余計なお世話だろう。

世間的には、選挙があるたびに、投票に行けという声がるさい。どこかの党首も「政治を変えるために投票しよう」と聴衆に、熱を込めてさかんに呼びかける。だから、「選挙に行くな」という説は、なかなか聞きなれない。これは逆説的であり、言い分を聞いてみると、本質的に、行けと言っている。

「たかがオレの一票でどうにもできるものでもないし、オレが投票に行かなくても、大勢に影響ないよ」と割り切って考える「無関心層」の人が相当数いるようだ。

特に若者に多いのだろう。確かにそれも一理ある。そこで、選挙があるたびに、公的な行政機関やマスメディアから、「投票に行け・行け」という声がかまびす

しい。選挙は、若者が声を上げるための、数少ない場でもある。ぼやぼやしていると、じいさんばあさんの組織票に負けてしまう。

そんな中で「若者よ選挙に行くな」という動画キャンペーンがあるのだから、おもしろい。ユーチューブ「若者よ選挙に行くな」だ。その命令口調を聞くと、第一に私が考えるのは、若者が選挙に行ってはいけない理由があるのだろうか、ということだ。

あるいは、うそのような意外な言葉に「あれ？ 本気でそう言ってるのか」と耳を疑ってしまうこともある。「政府は、若者に選挙に行ってほしかったんじゃないのか」

それとも、「行くな！」と言えば、「行こうとするような『ひねくれものたち』の反発心を期待しているのか」とうがった見方をしてしまう。高圧的に、「行くな！」と言われては、つい反発して「意地でも行く」という人がいるだろうけれど、それは、投稿者の思う壺つぼだろう。「あつそう、行かなくていいのね」と、素直に従う人もいるかもしれない。でも、動画では次に「行かなくていい理由」が示されるから、それを見てからでも遅くはない。

その映像の中では、素朴なおばさん・おじさんが訴

えるように、語りかけてくる。行くなの理由をそこで説明する。しかし、それを聞いてみると、行くべきだという趣旨がだんだんわかってくる。

これは、過激なことを言って、注目を浴びようとしたものだ。つまり、逆説的な手法を用いて、選挙に行くことを推奨している内容になっている。

実は、その言葉の後に、条件が付いてくる。その条件とは、「日本が平和であることを望まないなら」なのだ。「なあんだ」というような、当たり前の条件だ。日本が平和であることを望むならば、選挙に行っていないわけだ。それならそうと、前提条件を先に言ってくれよ、と文句の一つを言いたくなるどころだ。

このセリフは「日本が平和であることを望まないよなやつは、選挙に行くな」とも受け取れる。これなら、今の政府幹部が言いそうなことだ。若者に対して、「あなたたちが選挙に行かなければ、老人主体の国になつてしまうかもよ。自分たちが思うような国にならなくてよ」と脅すようなことも言っている。政府のプロパガンダ的だ。

日本が平和であることを望まない人（たとえば、兵器を売りつける人たち）の中にはいるから、その主張をするためには必要条件になる。なお、平和であるか

どうかのためだけに検挙に行くものではないだろう。国がどうであつても、あるいは国のためというよりも、自分が暮らしていけることを望む人がけっこう多いだろう。利己的な動機だけでなく、自分の将来に不安をもち、切実な気持ちで、安定した職を得たいと願っている若者たちがいる。

これは、一種のトリックを使ったのだ。「選挙に行きなさい」では、誰も見向きもしないし、「行こうとしているのに、行きなさいでは、気がそがれるなあ」という若者もいることだろうから、キャッチコピーのようなセリフを誰かが考えたのだろう。そこで、「選挙に行くな！」という奇抜なことを言って、関心を持たせようとしたのだろう。「日本が平和であることを望むのであれば、選挙に行きなさい」でも、りっぱな言い分であり、私はいいと思うが……。あとから条件を出すのには、大人のずるさだろう。この場合、許される範囲内のずるさだろうけど。

選挙権は、その昔、特定の男性にしか与えられなかった。今では、年齢の制約があるにしても、性別を問わずだれでも、選挙権を持つ。貴重な権利をわざわざ放棄する手はないだろう。行けと言われるまでもないことだ。われわれ有権者の投票で、ささやかな一票で

あっても、厚顔な政治家たちにプレッシャーをかけられると思いたい。票がまともにカウントされない東欧の某国などと違って、日本では確実に数値として示され、反映されるのがうれしい。

政党の思惑で、特に政党の幹部が票の入りそうな有名人を立候補させることがある。「名の知れた有名人なら、何も考えないヤツらが票を入れてくれるだろう」という思惑がある。そんな候補者は、当選しやすいし、現実には、その多くが当選してきた。確かに、何も考えないで、「テレビなどで顔を出している人だから」などの単純な理由で投票する人が多いのだろう。

私でさえ、じっくり考えて決めているわけではなく、ほとんどいい加減に投票してきた。〈こいつに投票するんじゃないか〉という後悔もたびたびあった。一般的に〈この人に投票してよかった〉と思うケースは少ないかもしれない。

そして若者はメジャーな政党に投票する傾向があるのかもしれない。政府はそんな流されやすい人たちをもっと掘り起こして、投票に行かせたい。

② 連合は民主党を見限るか

【毎日新聞朝刊 2022/5/4 一面、労組分断
連合がおかしい。夏の参院選が迫る中、立憲民主、国民民主両党への支援力が入らず、むしろ自民党への接近が目立つ。】

【Japan Times 2023/4/26 National

自民党は、国内の労働組合を傘下にする連合との結びつきを強化することに注力している。700万人の組合員を擁する連合の新年会に岸田氏は2年続けて参加した。自民党の2023年方策で、連合との関係を強化することを明らかにしている。連合を味方に引き入りたい思惑がうかがえる。

2月26日首相は、物価を上回る賃金の上昇が必要だとして、経営側と労働側に働きかけ、賃上げを促した。

自民党は、働く者の側に立ち、雇用の安定や構造的賃金の上昇を確立させたいとする。

3月15日には連合の芳野会長の求めに応じて、政府・労働側・財界の代表者会議を8年ぶりに開催した。互いに好ましい政策を実現する方向を確認した。けれど芳野氏は、連合が（選挙で）自民党とは一定の距離を保つことを強調した。

4月7日〔写真〕首相官邸で、岸田首相と芳野会長が握手している】

【毎日新聞夕刊 2023/5/24 総合】

国民民主党・玉木代表が連合会長・芳野氏と会談。連合は国民民主党の最大支援団体だ。芳野氏は、次期衆院選に向けて玉木氏に、立憲民主党との選挙協力を行うよう要請した。それに対し、玉木氏「お考えを受け止めた。まだ我々は前回の擁立数にも至っていない。今はとにかく、連合の政策に合致した候補者の擁立に努めたい」】

【毎日新聞朝刊 2022/6/8 クローズアップ】

今年の春闘では、経団連が5月29日に公表した集計では、賃上げ率は平均3.91%。連合の6月1日時点の集計でも賃上げ率は3.6%で、「30年ぶりの高水準」となった。成長産業への労働移動を促す。】

連合は労働組合の上位組織であり、全体的に取りまとめている。年々、組合員の減少傾向があるけれど、労働者の団体としてまだ大きな組織力を誇る。その組織力で、政治的選挙にも一定の影響を及ぼしてきた。

連合が支持母体となっている政党は、かつては社会党であって、今は、その流れを汲む民主党（立憲民主党、国民民主党）だ。与党・自民党に対抗として来た野党グループだ。ただし、民主党は左派としてのイデオロギ

ー色を薄め、労働者階級を意識せずに、国民的な政党を標榜している。支持層があいまいになるとともに、総合的な支持率を失いつつある。批判勢力としての存在意味はあるけれど、もう政権交代の目がなくなっている。政権をとらなければ、思うような政策立案ができないのは当然だ。予算案など重要な法案は、すべて政権与党の自民党によって押し切られている。つまり民主党は、与党の法案に反対するだけの、抵抗勢力の役を果たしているだけだ。

連合のトップに芳野友子氏が就いてから、徐々に変革の動きを見せている。古い体質を残す連合に新風を吹き込んだ形だ。支持政党に活力がなく、労働者の声が政治に反映しにくくなり、変革に迫られている状況がある。連合は、長年、対立してきた政党（自民党）のほうに軸足を移す気配を見せている。保守（右派）と革新（左派）の色分けが薄くなり、自分たちの要望を聞き入れてくれる政党であれば、もう、どっちでもいいのかもしれない。

連合はかなり日和見的になっており、大きな方針転換のときを迎えている。もう万年野党の民主党ではだめだという判断だろう。民主党にこだわる必要もないわけだ。「勝ち馬に乗り換えたい」という表現ができ

そうだ。立憲民主党と国民民主党が不仲になっていることにも、嫌気がさす要因だろう。

連合が自民党寄りになれば、民主党の骨格が揺らぎ、文字通り、骨抜きになる。

自民党側、岸田政権にも、連合を味方に引き入れたという思惑があり、連合に歩み寄っているから、ちようによい機会なのかもしれない。

今（2023年5月）近々衆院選がありそうだという状況で、立憲民主党と国民民主党は、選挙協力ができていないという。自分の党の候補者を立てたいから、譲れないわけだ。たがいに、一人でも多く当選者を出し、党勢を立て直したいという切実な状況がある。下手をすると、選挙でともに負ける恐れがある。

そもそも連合自体、構成する組合の所属人員が、年々減っているから、影響力が弱まっている。もう、民主党を政権与党に押し上げる力はない。労働組合の弱体化がめだつ。労働組合の一番メインの仕事は従業員の給料を上げることだが、それもままならず、近年の政府は、日本全体の経済的な低迷を見かねて、企業経営側に「従業員の給料をもう少し上げてやってくれよ。大企業が率先して給料を上げないと、その他に波及しないから、頼むよ。経済の好循環が回らないと、

政権としても困るんだ。なんとかミクスが失敗だったといわれてしまうだろ。内部留保を少しは従業員のために吐き出してくれよ」などと申し入れるのだろう。

連合に見放されたら、立憲民主党、あるいは国民民主党の支持母体として何があるのか、よくわからない。この先の党勢がますますしほみそうだ。自民党に対抗する勢力として、もう、日本維新の会ぐらいいしか期待できないのでは、少々寂しい。

つまり、与党の野党の間で、かなり日和見的、よく言えば、柔軟な対応をしている。

自民党の支持母体に連合が入れば、自民党として、これ以上のうれしいことはないだろう。一人勝ちの選挙戦になるだろう。

自民党には財界からの寄付が多い。経営者と労働者は対立してきた歴史がある。今後とも対立があっても、政治的に調停してもらえのだろうか。自民党としては、どちらかの寄付が多いか、票が多くとれるか、という判断になりそうだ。寄付も取りたいし、票も取りたいというのが、本音だろう。

参考・言葉の意味

れんごう【連合】：広辞苑第六版より

(1) 全日本民間労働組合連合会の略称。1987年総評・同盟などの労働4団体の枠を越え、大多数の主要民間単産により結成。

(2) 日本労働組合総連合会の略称。89年(1)に官公労組が加わり発足したナショナル・センター。

③ 学校で指導死

【毎日新聞朝刊 2022/11/7 社会

次男死亡(学校の教室から飛び降りた)から18年、遺族が出版した。安達和美・著『学校で命を落とすこと』あつふる出版社

登校中に拾ったライターを所持していたのを見つかり、担任から指導を受けていた途中だった。喫煙を認め、それを知っている友人の名を告げた。】

【毎日新聞朝刊 2023/5/30 社会

学校での「指導死」を見過ごすな。教員による「不適切な指導で子どもを亡くし、「指導死」の実態調査などを求めて、遺族らがこども家庭庁に要望書を出した。児童・生徒への「不適切な指導」の具体例。

・大声で怒鳴る、ものを叩く・投げる等の威圧的、感情的な言動

・生徒側の言い分を聞かず、事実確認が不十分なときに思い込みで指導

・連帯責任を負わせることで本人に必要な以上の負担感や罪悪感を与える

ある遺族の三男は始業式の日、夏休みの宿題を忘れたことから職員室で担任の女性教諭から大声で「やるべきこともしつかりしないで、自分の中でどうも思わないの?」第三者委員会の調査報告書によると、女性教諭は普段から生徒指導の際に机やいすを蹴ったり大声で怒鳴ったりしていた。母親「暴力や体罰だけでなく、教員の態度や言葉による指導が市に結びつく!」

【毎日新聞朝刊 2023/6/17 なるほドリ

教員による子供の指導死。体罰や叱責原因で自殺。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/24 社会

2018年に自殺したさいたま市立南浦和中1年の男子生徒について、第三者委員会の報告書は、部活の顧問が部員に暴言を吐く不適切な指導があったとする一方で、自殺の直接的な影響はなかったとした。】

学校で教員に叱咤されて、自殺する児童・生徒がいることに、注目されている。保護者たちが学校に詰め寄っても、学校側は保身のために責任を回避しようと

する態度が目立つ。教育委員会も、学校側の報告書をうのみにする。第三者委員会が調査することになって、積極的に動こうとはしない。学校側の指導が行き過ぎだったという結論はめつたにださない。

最近、指導死という言葉が使われるようになってい。児童・生徒が、教員や部活の顧問に罵倒されたりすることによって自殺するのは、叱責に対する免疫ができていないせいなのかもしれない。家庭で過保護ぎみに育てられると、ことさら暴行暴言に対して心身が弱いのもかもしれない。教室や、部活の場で他の生徒が何人もいる前で、これをやられると、さらにダメーじが大きくなる。みんなの笑いものになるからだ。自分のみじめさに、悲嘆するばかりだ。「もう生きる価値のないダメ人間」と認識させられる。多感な少年少女のショックは大きい。自殺を試みるかもしれない。それが成功すると、事件になる。

2004年3月、長崎市立小島中で中学2年だった安達雄大くん(当時14歳)に関する「拾ったライター事件」が指導死の典型例だろう。複数の教諭が一人の生徒を頭っから「喫煙者扱い」し、長時間にわかって詰問し、叱責したことに問題がある。

喫煙に関して、教諭がその生徒を指導した。生徒は「タバコを吸ったわけではない」と言い張ったのだが、教諭たちは生徒の言葉など信用しない。ライターを持つていたことが喫煙の「動かぬ証拠」なのだ。指導教員として、生徒の喫煙は断して許されない、重大な「犯罪」だった。「道で拾ったなどと、見え透いた嘘をつくな、コノヤロウ」と、担任は烈火のごとく、怒りまくったのだろう。何よりも、喫煙者がいるとあつては、学校の体面に傷がつく。「タバコが青少年の健康に悪いから」という本来の理由など、もう彼らの頭には、かすめもしなかったのだろう。

「たばこを吸うために、ライターを持っていた」のであり、タバコを隠れて吸っていたに違いなかった。

当時は百円ライターといって、喫煙者の多くが、まだ燃料が残っていても、惜しみなくポイポイ道に使い捨てていたものだ。それを拾って手に持っていたのを友人たちに見せていたという言い分にも、十分に合理性があった。さらに、タバコも灰皿も身近にあつたものであり、中学生が1〜2本を手にする機会は十分にありうる。しかし……

この事件の核心を私が脚色してみると――
「わが学級で、喫煙者がいたとは情けない、あの真面

目そうな生徒がだ」裏切られた気持ちでいっぱいになった。

「よし、ここは本格的に取り調べよう」と教師は決意した。他の部活動の生徒を早めに帰らせ、その生徒を呼びつけると、もう一人の教師を立ち合わせ、一室で取り調べを始めた。

「これをどこで手に入れた？」

「拾いました」

「コノヤロー、見え透いたウソをつくな！ほんとうのことを言え！」

教師は吠えまくる。

「道に落ちていたのを拾いました」

「まだいうか、コノヤロー」ここで机をバンと叩く。

「強情を張るな！」頭を小突いた。

「たばこを吸ったんだらう？正直に言うんだ！ええい、吸ったんだらう？」

「吸ってはいけないものを、どうして町で売っているんですか！」ふとした疑問を口にした。

「吸っていいと思ってるのか、バカヤロー。テメーが質問するな、オレの質問に答えればいいんだ！」

生徒の目から涙が零れ落ちた。

「泣くな！本当のことを言えばいいんだ。吸ったんだらう？」泣くことも許されぬ。

教師たちの尋問が長時間にわたった。

やがて、一度試しに吸ったことを認めた。

「ええい、だれと吸ったんだ、そのとき仲間がいたんだらう？」

友人の名前を出した。

教師たちは、喫煙グループを摘発できたことで満足だった。「もういい。きようは遅くなったから、帰れ。処分は追って申し付ける。停学を覚悟せい！」

「ボクは卑きよう者だ。友人は迷惑なことだろう。この場を逃れたいために、つい口に出してしまった。喫煙仲間にしてしまった」友人に、申し訳ない。もう合わせる顔がない。オニのような教師たち、彼らは何もわかっていなんだ。こんな学校、もうイヤだ」

生徒は校舎4階の窓から、夜空の下に飛び降りた。

あわただしい動きがあった。学校側（教育委員会）は、教諭の指導（激しい叱責）による自殺とは認められなかったものだから、あるいは自殺を表に出したくないものだから、当初、書類の表題を「転落事故死」とした。

④ なぜ制服を着てこない

【毎日新聞朝刊 2023/5/18 女の気持ち 「お初」桜井

暁子さん (73)

私が入学するときから、その中学校では制服を着用することになった。新学期の朝礼で、1人だけ私服だった私を教員が「なぜ制服を着てこない」と大声でとがめました。私は彼から目をそらさず「貧乏だからです」と答えました。」

これは、おそらく、1960年代前半の話だ。戦後の貧しさがまだ多く残っていた時代だろう。特に母子家庭では、女性の社会的・経済的地位が現代よりさらに低かったし、政府の支援も乏しかった。

「なぜ制服を着てこない」は質問文だ。質問されれば、答えることが基本なのだが、理由を答えなくていい場合がある。この場合も、教員は答えを求めていたわけではなく「制服を着ろ」と指示する代わりに、質問形式の言葉が発したものだ。制服を着てこない理由などは知りたいとも思っていない。「制服を着ろ」と言いたかっただけだ。

答えを求めていないのに、疑問文で言うのは、大人

のずるさが表れている。回りくどい言い方で、直接的に言わないのだ。「下手な言いわけでもしようものなら、承知しないぞ!」という脅しの意味を含んでいる。答えにくいことを言わせるための疑問文でもある。そんなとき、質問の言葉通りに、まともに答えようものなら、そんな答えを期待していなかった質問者が、さらに苛立ち、憤慨したりするから、厄介だ。「テメー、口答えしたな!」

私など、そんな意地の悪い質問はしないようにしている。私が他人に質問するときは、単に疑問を持った時だけであり、他意はないのだ。中には、そんな「他意」をかんぐる人がいて、まともに質問に答えてもらえないことを、私はときどき経験する。

朝礼で、つまり級友たちの前で、一人の少女に「貧乏だからです」と言わせてしまった教員は、今では教育委員会あたりから「配慮に欠ける!」とされるだろう。

質問したら、おのずと答えが返ってくるのは、当然の成り行きだろう。「貧乏だからです」という最悪の答えを引き出してしまった。子どもの口から「貧乏だからです」と言わせたのだから、どうかしている。

彼女はクラスの中で失笑されたはずだ。クラス的笑

いものだ。これで彼女はアウトになる可能性が大きかった。不登校になるかもしれない、自殺してしまう可能性さえもあった。教員からとがめられながら、一人だけ制服を着ていない屈辱の日々に耐えなければならなかった。「ちゃんと説明したことだから……」というさばさばした気持ちがあったかもしれない。彼女は気丈だったから、「貧乏だからです」ときっぱり言うことができた。級友たちから笑われても、落ち込まなかったようだ。

この場合、質問形式で生徒をなじったことが一番いけない。教師としては「家庭で制服の用意ができたなら、着なさいね。似合うと思うよ」などと、ふんわり言うべきだった。

〈制服を着なさい〉という意味を込めて「なぜ制服を着てこない」と言ったつもりだったのだろうが、純真な子どもは、そんな間接的な意味を付度しないし、質問されたことに率直に答えることが大事だと思っただけだ。家が貧乏だから、仕方がないという、自分ではどうしようもないことを説明したかった。母が一生懸命やっている姿を見ているから、母のせいでもない。世の中、貧富の差があり、たまたま我が家は貧しかった。いじけている時ではない、と少女は考えたのだから。

う。

記事の内容をもう少し説明すると、彼女の家庭は母子家庭で、お母さんは裁縫の仕事をしていた。中学校の制服が決まり、大量の制服を作る仕事に追われた。その仕事を優先しなければならず、自分の娘の制服の製作は、後回しにせざるを得なかった。しばらくしてようやく制服ができて、彼女が制服姿で中学校に行く時、級友たちから「お初！」の祝福（ひやかし？）を受けたという話になっている。

だいたい、中学校で制服を着なければいけないというのは「ブラック校則」の一つだろう。制服が生徒とって必要なものだろうか。私服が勉強に差しさわりがあるものだろうか。

学校側は、生徒の個性をつぶし、画一的にすることで自己満足しているところがある。持ち物やヘアスタイルなどにも、口を挟む学校が多い。それで教育費に金がかかる一因になっている。貧乏な子どもたちを振るい落としたいのだろうか。

それでは、「制服を着ていない生徒は、わが中学校に来るな！」の意味になっている。もしも彼女が学校に来なくなったと仮定すれば、「ナニー？ 制服を着てこなかったヤツが不登校になっただとお？ そんな

変わり者は、うちの学校に来なくてケッコー！ 例外や落ちこぼれはどこにでもいるもんだ。あのガキは特別学級にでも入れてやれ！」と言い放つのだろう。

生徒に一律の服を着せよう、という強い思惑が学校側にあつたとみえる。この中学校でその年から制服を決めた経緯は明らかではないけれど、制服が買えない家庭があることを、彼らが考えていなかったのなら、校長や教育委員会の指導力不足、あるいは、いいかげんな思い付きに問題があつたのだろう。

それを決めた背景には、文部省（今の文部科学省）の通達があつたのかもしれない。PTAに諮^{はか}って決めたことだろうか。PTAから多少の反対意見があつたとしても、学校の方針に押し切られてしまった経緯が考えられる。

制服は、軍隊で敵味方を識別するために制定したのが始まりだろう。教育現場では、敵味方を区別する必要もないし、生徒の外観にこだわる必要もない。外観でなく中身を育成するのが、公立中学校の本筋だろう。

⑤ 世田谷区どろぼうの正体

【毎日新聞朝刊 2023/5/11 社会

2月に東京・江戸川の住宅で住民の63歳男性が殺害された事件で、5月10日、警視庁は事件前後に周辺を歩いていた人物が防犯カメラに写っていたことから、中学教諭を逮捕。事件当時、母親も在宅しており根左手首を切られた。山岸さんは玄関付近で刃物の柄の部分だけを握って倒れていた。刃の部分は見つからない。男が窃盗目的で住宅に侵入した後、鉢合わせ？】

【毎日新聞夕刊 2023/5/11 社会

江戸川区の住宅で、山岸正文さんが殺害された事件で、教諭は以前にも男性宅に侵入したか。以前の足跡が残っていた。当日、鉢合わせし、殺害した疑いがあ^らる。】

【毎日新聞朝刊 2023/5/12 社会

江戸川区63歳殺害容疑で逮捕の教諭はアリバイ工作をした？

勤務実態と記録（タイムカード）に相違がある。1月下旬にも山岸さん宅を訪れていたとみられる。尾本容疑者は投資やギャンブルなどで500万円前後の借金を抱えていたとみられる。】

【毎日新聞夕刊 2023/5/12 片断片々、社会

江戸川市住宅殺害、容疑者に、投資やギャンブルで多額の借金があったとの情報がある。金品を盗む目的だったのか。

教諭「2月に招かれ訪問した」「1月下旬に荷物を運ぶのを手伝った」】

【毎日新聞朝刊 2023/5/13 社会

東京・江戸川殺人、現場に教諭のDNA型の血か。現場の住宅から血の付いたマスク留め金が見つかった。山岸さんともみあいになった際に、容疑者自身も負傷したとみられる。】

・教諭とギャンブラー

この男の表の顔は、中学校養護学級の教諭であり、裏の顔がギャンブラー、あるいは他人の住居に忍び込んで金目の物を盗む泥棒だった。

教える側の立場にある人が、一番してはいけないことを実演し、結局、容疑者として逮捕されたのは、みっともない極みだ。

教諭としての評判は良い。家庭の中では、〈良き夫良き父〉を演じていたという。容疑者として知れ渡ったとき、驚きの声が上がったという。おそらく生活費を切り詰めたりせず、多額の借金を抱えていることな

ど、近親者の間でもほとんど知られていなかったようだ。

・ギャンブルで借金

容疑者がギャンブルで多額の借金を抱えていたことが、基本的にダメなところだ。投資もしていたというが、おそらくFX（為替相場）のような投機をしていたんだろう。いまだき、借金をして儲けるというような投資話はほとんど詐欺だろう。しかも、借りる手続きは簡単だが、返すのが難しいところから、金を借りているという。借金をしない範囲、及び家計に影響しない範囲で、金を使うのなら、許容できるものだが、損を取り戻すために、さらに高利の借金をした。

ギャンブル依存症になったとみえる、

・おなじ犯行(空き巣狙い)をくりかえした

一か八かのギャンブラー気分で、空き巣狙いをしたのだろう。人の金で借金の穴埋めをしようと考えたのだろう。

この家に忍び込んだのは、2度目とされる。一度うまくいって味を占め、再び忍び込んだのは、どうだったか。一度被害にあうと、その家の者は現金を目につくところには置かないことや、防犯カメラを取り付けるなど、対応策をとるはずであり、空き巣狙いにとつ

て危険度が増す。完全な空き巣ではなく、老女が家にいた。

犯行現場は、男の家がある住所と職場の学校に近く、歩いて行ける範囲だ。日中に忍び込んでいることが、あまりにも大胆だ。今時、防犯カメラが町中のところどころに置かれているから、ほとんど確実に映されてしまう。犯行時間前後に歩いていた者が真っ先に疑われる。

・ナイフ持参

この男は、ナイフを持っていた。住民や近隣の人に見咎められ、取り押さえられるのを防ぐために、ナイフで抵抗しようとしたものだろう。一つの見方として言えば、自衛のためのナイフだ。

帰宅した住民と鉢合わせになり、もみ合いになって、この男はナイフを取り出した。それを使用したことで、殺人罪に問われる。

そのナイフは、もみあいするとき、柄の部分と刃の部分が取れてしまっていた。刃の部分は男が持ち去ったらしく、警察では発見できていないそうだが、安っぽいものだったようだ。それでも、殺傷能力はある。

単なる空き巣が、殺人事件に発展した。息子のピンチに、もみ合いに加わった母親も切られた。

そのもみ合いは、怒号と、大きな物音を立てたと思われるが、近隣の人には聞こえなかったか、あるいは、聞こえない振りをしていたから、情けない。何はともあれ、助けに行くべきだろう。

このナイフの使用は、どんな屁理屈を並べても、正当化できないだろう。ナイフのほかに、人をひるませるための有効な道具が考えられなかったのか。(それを紹介するのは、差し控えたい)

・言い訳・アリバイ工作

この男は、容疑者として捜査線上に浮かぶことは、覚悟していたようだ。でも、何とか言い逃れしようと、容疑者として捜査官に質問されることを想定し、言い訳を考えて用意していたという。あくまでしらをきろうとした。

そんな見え透いたウソに、納得してしまうような捜査官はいないだろう。

容疑者は、アリバイ作りもした。当日午後になって退勤したのに、夕方まで学校にいたという勤務記録に後から変更した。そんな変更がやすやす通ることが、学校側の勤務管理のいい加減さだ。教諭の上司は、変だとは思わずに、それを認めてしまっている。それだけ信用されている教諭だったわけだ。

⑥ タリウム毒殺事件の渦中の人

【毎日新聞夕刊 2023/3/4 社会】

タリウム殺人容疑者、知人に関与を否定していた。逮捕後、容疑者は黙秘しているという。事件前日の11日、死亡した立命館大3年の浜野日菜子さん（当時21）と飲食後、2人で浜野さん宅に移動した。浜野さんは容疑者が経営する会社のスタッフとして働いていた。」

【毎日新聞朝刊 2023/3/5 社会】

タリウムで京都北区の大学生殺害容疑で、宮本一希（37）容疑者を逮捕。「浜野さんの部屋で酒を飲んでいたら、急にせき込み始めて看護していた。12日朝になっても症状が回復せず母親に連絡した」】

【毎日新聞朝刊 2023/3/26 社会】

京都市北区の立命館大学生の殺人罪で起訴された宮本一希被告の叔母（63）が3年前、体調急変で意識不明の重体になっている。その血液からタリウムが検出された。」

【毎日新聞朝刊 2023/5/25 社会】

大学生殺害の宮本一希（37）被告、2020年7月、

叔母にもタリウムを摂取させ、殺害しようとした容疑で再逮捕。叔母が倒れた後に、宮本容疑者はマンションに転居、叔母の銀行口座から約5000万円を引き出した。その2カ月後に叔母が経営する不動産会社を引き継ぎ、代表取締役就任した。

宮本被告が17年10ごろ、叔母の会社で働かせてほしいと求めたが、断られた。被告が東京の大手企業を退職して京都に戻った時期だ。代わりに、親族が役員を務める会社を取締役として任せたが、彼は数十万〜数百万円の出金を繰り返して経営を悪化させたため、20年2月に叔母に解任された。

その後、舞妓を派遣するイベント企画会社を叔母が設立し、容疑者を代表取締役に据えたが、自由に現金を使えないように叔母が管理していた。」

【毎日新聞夕刊 2023/6/14 社会】

タリウム購入、京都府内の業者に記録されていた。2020年5月。叔母が倒れる約2か月前だった。「京都大学の宮本」と名乗っていた。」

この男には。へまなところと賢いところの両面がある。思いつく発想が場当たりのだ。。

犯罪に使用する毒薬タリウムを購入するとき、本名

を名乗ってはだめだろう。店の人に「身分証明書を見せろ」と言われては、仕方がなかったのかもしれない。〈そんな毒薬を使って、ばれることはない〉と思ったのなら、大胆すぎる。タリウムで人が殺せるか、ばれずに済むか、を考えると、一般の人はなかなか実行は難しい。

彼は、他人の金であろうと会社の金であろうと、引き出してしまっていた。その金の使いっぷりが見事（皮肉を込めて）だった。しみつけたことはしていない。この男にいくら金を持たせても、すぐ足りなくなる。金が入れば、使いきっていた。そんな性癖なら、普通のサラリーマン生活は無理だろうし、何をやっても破綻するだろう。

京都に戻る前は、東京の大手企業で働いていたというから、それなりの学歴や能力が認められていたのだろう。友人や交際相手にも恵まれていた。ただし、彼は金の塚っぷりが乱脈だから、ご相伴にあずかる目的で彼に近づいたのかもしれない。

賢いはずのエリート的人物が、どうして自堕落な生活をしてしまったのか、私は不思議に思う。

叔母は堅実な経営者で、多くの資産を築いていた。資産家の叔母にとって、容疑者は甥（兄の息子）だけ

ら、親族としてのよしみがあつたのだろうが、金使いの粗さには、悩まされていたようだ。金がなくなつて、とうとう彼は、恩人の叔母の資産に目を付けた。

人の金を自分のものにできれば、一番楽な所得だろう。働くものが嫌いなものにとつて、一番の近道だ。彼のたくらみを想像してみよう——「叔母を殺せば、すべての叔母のものを自分のもののできる。殺すにはタリウムを飲ませることだ。飲み物の中にタリウムを入れておき、オレはそれを飲むように仕向けるだけだ。あとは、飲み込んだタリウムが体内で化学反応して殺してくれる」

悪魔のささやきに、彼は賛同した。タリウムが毒物であることを知っていたし、それなりの手続きをすれば、手に入ることが分かつていた。

タリウムでは、摂取量にもよるが、人はすぐに死ぬわけではないようだ。全身に回って呼吸不全などの中毒症状が出るという。

宮本一希は、二人の女性が苦しむのを見ながら、長時間付き添っていた経緯がある。二人の異変に対し、すぐに病院に連れて行かなかつたし、自分で救急車を呼ぼうとしなかつた。大学生の場合は、夜に苦しみ始めたのに、翌朝になつて母親に電話したとあるから、

12時間以上苦しんでいたことになる。母親を呼ぶよ
り、自分で119番通報するのが先だろう。親密な関
係の相手なのに、宮本一希の冷酷さ・残忍性がよく表
れている。

たとえ、叔母が死んでも、叔母の遺産が自分のもの
になるとは限らない。叔母は死んではない。意識不
明のまま病院で治療を受けている。それなのに、勝手
に、祖母の預金を引き出したり、不動産会社を引き継
ぎ、取締役代表になれたのはどうしてだろう、疑問を
持つ。

預金のパスワード（叔母がしっかり管理していたは
ず）を探り出し、手続きのために必要な私文書や法人
文書を偽造、あるいは捏造した疑いがあるだろう。そ
んな事務手続き、役所対応など、一人でこなしていた
とみえる。それも一つの才能だろう。才能を発揮しな
がら、危ない橋を平気で渡るような人、あるいは危な
い橋を楽しんで渡る人だろう。成功報酬が大きいと思
えば、何でもやるような人だろう。犯罪者の素質のあ
る人だ、と私は解釈する。

叔母はその病院で、当初タリウムの中毒とは解明さ
れなかった。医者たちはタリウムなど疑いもしなかつ
た。死亡しないと、徹底的に原因を調べないのかもし

れない。ここまでは、宮本一希の思惑通りに進んだわ
けだ。

うまくいったことに味をしめたかのように、別れた
くなつた若い女性にも、彼はタリウムを服用させた。

この時、金で解決できなかったのだからかと私は疑問
を持つが、彼は金の支払いを惜しんだとみえる（持ち
金がなくなつた？）。そもそも、家族公認の交際相手
女性を殺して、ただですむわけがない。あまりにも安
易で、無慈悲なやり方だ。

この変死事件で、警察が動き、タリウムが検出され
た。毒殺事件だったから、警察が張り切つて捜査する
ことになる。

そして叔母についてもタリウムが検出され、警察は
入手先をも突き止めた。購入者が「宮本」であること、
叔母の容態が急変したときの2か月までであることが分
かった。つまり、宮本は2人分のタリウムを購入した
ことになる。「京都大学の宮本」では、学歴詐称でも
ある。

⑦ 猟銃所持者が激高したわけ

【毎日新聞朝刊 2023/5/26 一面、社会】

長野、立てこもり3人死亡。もう一人刺された女性が救助できないままだ。午後8時前後に建物から複数回の発砲音が響いた。最初に通報したのは近所の畑で作業していた人で「女性が刺された」】

【毎日新聞夕刊 2023/5/26 一面、社会】

長野県中野市での事件、死者4人に。事件は5月25日午後4時25分ごろ、女性二人がナイフで刺された。そして4時37分ごろ、パトカーで駆けつけた警察官2人に、男が猟銃を発砲した。その後、男は自宅に立てこもったが、明け方、その家の長男・青木政憲（31）容疑者を逮捕。容疑者は迷彩柄の服、帽子にサングラス姿だった。】

【毎日新聞朝刊 2023/5/27 社会】

造園業の男性（63）は畑仕事をしていると、知人の妻が慌てた様子で駆け寄ってきた。そこには村上幸枝さん（66）が倒れていた。容疑者が銃を持ち、腰にはサバイバルナイフをぶら下げていた。パトカーで到着した警察官が政憲容疑者に向かってクラクシオンを鳴らした。その直後、容疑者は警官に銃口を向け、笑み浮かべて、「パン、パン」

男性「最近は何とも挨拶をしなくなった」

ここ数年消防団や祭りの保存会といった地域の活動に

顔をささなくなっていた。父親の正道氏は周囲に「息子がふさぎ込んでいる」と漏らすことがあったという。】

【毎日新聞朝刊 2023/5/29 社会】

長野立てこもり、パトカーを見て発砲を即断したか。警官の至近距離からだった。「男がサバイバルナイフで女性を刺した」との通報を受けて現場に到着したとき、パトカーの窓ガラス越しに発砲した。

容疑者は「（拳銃で）撃たれると思って撃った」などと供述している。二人の女性は容疑者の自宅前を散歩していて襲われたとみられる。】

【毎日新聞夕刊 2023/5/30 社会】

長野県中野市4人死亡、「女性2人に『ひとりぼっち』だと馬鹿にされた」という趣旨の供述をしていることが判明した。刺殺を目撃した男性（72）「なんでこんなひどいことをするんだ」というと、容疑者「殺したから殺した」】

【週刊文春 2023/6/8日号、長野「名家」の長男が囚われた郷里の呪縛】

「オレのことをボツチだとバカにしている」妄念に囚われた青木政憲は、迷彩服に身を包みその二人を待ち伏せていた。携えた大振りな鞘さやには、刃渡り約三十セ

ンチのサブバイバルナイフ。

捜査関係者「被疑者は、日課の散歩コースとして自宅前を通る二人に『悪口を言われていると思った』と語った。警察官を売ったのは『射殺されるからと思っただから』と供述。」

若いころ、美男美女の両親の元で、三人兄弟の長男として生まれ、大切に育てられた。両親は子育てに熱心だったという。幼少期は明るい元氣な子だった。野球部にも所属し、「お母さんは練習試合や大会があると、必ずと言っていいほど応援に来ていた」成績も上位だったが、高校受験で、ある私立高校には落ちたものの公立の進学校に進んだ。高校時代から友達はいなかった。高校で成績が伸び悩んだ政憲は、一浪の末、神奈川県にある某大学の情報通信系の学部に入學した。寮に入るが、他の学生と馴染めず、東京都目黒区のアパートに引っ越して一人暮らしを始めた。次第に政憲と連絡が取れなくなり心配した両親が上京すると、「ここは盗聴されているから気をつけて」盗聴を恐れて携帯電話の電源も切っており「部屋の隅に監視カメラがある」。だが、両親にはカメラがあるようには見えなかった。「大学で『ぼっち』とバカにされている」と言った。両親は病院に連れて行こうとしたが、政憲は

「俺は正常だ」と拒んだという。結局、政憲は大学を中退し、2012年、郷里に戻る。政憲は父の事業を手伝い始めるが、仕事仲間「声をかければ返事はするんですが、聞かれたことにしか答えず、うつうつとして暗い子でした」

同地区の男性「当初は地区の祭りの保存会に参加した。笛の名手だった父にならない、笛を担当した。自分から人に話しかけることはなかったが、飲み会にもちゃんと参加した。四年目ごろから連絡が取れなくなり、そのまま退会した。本人ではなく父が『すみません』と日本酒の瓶を持って挨拶に来ました」

親友も彼女もいない政憲の唯一の友達が白い紀州犬だった。愛犬を連れて畑仕事に従事。それ以外は自宅のテレビで何時間もサブバイバルゲームに没頭した。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/17 社会

長野4人死亡で再逮捕。県警中野署の玉井さんは猟銃で撃たれた後に刃物で複数回刺された。刃物による傷が致命傷になったと判明した。青木容疑者は「覚えていない」と容疑を否認しているという。使用された刃物は同一で「ボウイナイフ」といわれる大型ナイフとみられる。使用された猟銃は「ハーフライフル銃」で使われた弾丸はスラッグ弾とみられる。】

猟銃所持者が最初に激高したわけは、陰口をたたかれたから……。容疑者自身、捜査の初期段階で、犯行の理由を二人に悪口を言われたと思ったから殺した」と供述している。

普段は、あいさつもまともにしな物静かな男だったという。彼は大学を中退した。その原因が今回の事件の伏線になった可能性がある。神奈川での学生生活の時に、いじめられていたという証言が聞こえてきている。〈地方からの一人暮らしで、都会になじめなかった〉とも推測される。いじめられていたというのは被害妄想的だった。神経質な性質を持つようになり、人と話すことを嫌っていたようだ。

彼の職業は農業と肩書されている。中野市議会の議長を務め、農業関連事業の経営者でもある父の店舗で働いていたりしたが、家にいることが多かったようだ。大型ナイフ（サブバイバルナイフというより、狩猟用のホウナイフ）や猟銃を好んで所持していたのは、彼の不安な気持ちの表れだったのかもしれない。

父は息子の変調を心配していた様子がうかがえる。家にもどってきた息子を親が気遣って、郷土芸能のチームに参加させたりもしたが、それも途中でやめてし

まった。やめた理由は不明だが、父親は、息子に続けてほしかった。チームのリーダー宅に酒を持参して、詫びを入れたという。無念の気持ちが表れている。

今回の事件で、息子が猟銃を持つことを止めなかった、あるいは止められなかったことが、父として大きな後悔になったことだろう。

〈猟のためならいいが、人様に対し銃口を向けては絶対にいかんと言ったのに……〉

父の正道氏は責任を取るような形で、中野市議会の議長を辞めた。ジェラート店を閉めたりした。でも、31歳の息子がやったことを親が責任を取るいわれはないだろう。

子どもの育て方や教育方針が悪かったなどと、この両親を責めたりするのは酷、と言うものだろう。対応が最善ではなかったにしても、それなりの愛情があり、世話や気配りをしてきたようにみえる。息子の挫折を見守ってきた。目標を見失って帰郷した息子を、祭りの保存会に入れたり、関係する仕事を与えたりして、一人立ちできるように配慮してきた。事件で息子の自殺を押しとどめた両親には、まだ希望があったとみえる。今後も、期待に沿わない不肖の息子に対し、苦渋の対応をしなければならぬ。この地域に居づらいた

ろうけれど。

二人の女性に悪口を言われたと思つたのがいつのころか、はつきりしない。当日は待ち伏せしていたから、それ以前のことだった。計画性があつたことになり、情状酌量の余地がない。さらにナイフを通信販売で入手したのが、事件の一カ月前だったという。殺意が生じてから、ナイフを購入したのなら、決定的だ。そもそも、そんな大型ナイフを所持するには、当局の許可が必要ではないのか。

二人は、夕方、毎日のように近辺を散歩していた。連れだって、おしゃべりをしながら、歩いたり、ジョギングをしたりしていた。お琴の家の前を歩くのも、散歩コースになっていた。

ある日、家の前を通り過ぎる二人の女性の話を、たまたま庭に出ていた男が耳にしていた。男は庭に潜むようにかがんでいたから、彼女らに存在が知られなかつた。彼の唯一の友といふべきイヌの相手をしていただろう。そこで男がどんな話を耳にしたか、明らかではないが、私が想像を膨らませると、
「この家に、陰気な若い人がいるのよ。顔を隠すようにしてフードをかぶり、迷彩色の服を着ていたりして、何をしているのかしら？」

「この家のおぼっちゃんのことね。もう若くもないのよ。もう30代になつたというのに、まともに働いていないそうよ。悠々自適の生活」

「親御さんとしては、早く嫁を貰つて、あとを継いでもらいたいでしょうね」

「跡を継いでも、どうかしらね。あんなむつつりしていたんでは、嫁の来てもなかつたりして、ハハハ」

それは、近所の、ささいなうわさ話だったので。ほんの「軽口」だったかもしれない。彼女らは早足で歩いてきたようで、男が耳にしたのは、通り過ぎるとき、ほんの片言だったかもしれない。しかし、聞きつけた男は怒つた。「ん？ それはオレのこと？ オレをバカにしおつて、許さん！」

ぼっち（ひとりぼっち）とは、悪意のない言葉だろう。むしろ、おしゃべり好きな彼女らにとって、一人であることに同情的な言葉だった。憐れむ意味もある。

しかし、彼にとつて最大限の侮辱だった。同情されたくもなかつた。悪口の最たるものとして、激高した。強い嫌悪感がわき上がった。自分ではどうしようもできない感情に突き動かされ、もう自制できなかつた。

彼には〈ぼっち〉と言われて、激高したケースがそ

れまでに2度あった、と関係者に証言されている。

「ぼっち」は、彼には理性を超越する「絶対の禁句」になっていた。神経を逆なでされたかのようなわけだ。最も気にしていた言葉だったとみえる。

「殺す！」

殺すことが、彼にとって「正義」のため、プライドのために、やらなければならないことだった。それは衝動的な怒りだったかもしれないが、彼の心の中では、消えることがなかった。

どうやって殺すかは、ナイフで刺す方法を選んだ。彼は、事件の約一か月前に、その大型ナイフを購入した。

凶行の場面を再現してみようー

「あのアマどもを、オレのナイフの餌食えじきにしてやる！次にアマどもがうちの前を通る時に、やってやる」

この日、彼はナイフを腰に下げ、時間を見計らって待ち伏せしていた。計画的だった。

「来たぞ！」 腰に下げていたフォルダーからナイフ

を取り出し、男が家のフェンスから飛び出した。男は、一人の女性にぶつかるように近づき、胸を刺した。力を入れて深く刺した。まみなく動かなくなった女性をみてから、もう一人の方に振り向いた。そしてナイフ

を構えた。

もう一人が恐怖におののき、その場からあわてて逃げ出したが、男が追いかけた。女性は、100メートルほど必死に走り、大きな農業用ハウスの近くにいた高齢の農作業者に向かって助けを求めた。

「助けて！ 殺される！」

しかし、その農園の盛り土で、足がもつれるようにつまずいて倒れた。そこへ追いついた男が背中からナイフで刺した。身動きして仰向けになると、彼は、その胸の中央に深く突き刺した。

それを見ていた農業者が後ずさりながら、叫んだ、「なんでこんなひどいことをするんだ？」

「殺したいから、殺すんだ」

その声の響きは冷静だったという。呼吸も乱れていなかった。農業者はもう何も言えなかった。ハウスの中に身を隠すように逃げた。男は達成感を得たかのように、もう何もしなかった。歩いて自宅の自室に戻った。

彼は「遺体の始末をどうするか」を考えた。「そのままに置いて置けないだろう」とりあえず、自宅の庭の一角に集めておくことにした。一人の遺体を前の道路から庭に移した。「もう一体は？ 台車で運ぼう」

彼は納屋から台車を引き出した。そのとき、遠くからパトカーのサイレンの跡が聞こえてきた。

「ん？ このオレを逮捕に来たんか？ 侮辱されたから、やったことだ。クソ、警察のヤツらに逮捕されてたまるか！」

「ヤツらは拳銃を持ってやってくる。どうしよう、ヤツらは拳銃を突き付けて、オレを撃つかもしいない」そんな時は、自分が持っているライフルで対抗するしかない、と思った。

自分の身を守るため、自室のキャビネットから猟銃の一つ、最も強力なハーフライフル銃を取り出し、スラグ弾（クマやイノシシの狩猟用）を複数込めた。

彼は大型ナイフを腰に下げ、ライフル銃を台車に乗せ、それを押しに行った。

彼が、約100メートル先の二人目の女性が倒れた現場近くにやってきたとき、ちょうど最初のパトカーが到着した。台車を押してきた彼と、ほとんど鉢合わせになった。政憲は台車を止め、銃を手に持って、ゆっくり走るパトカーと平行して歩いた。中の警察官の様子をうかがった。自分に拳銃を向けたりするのなら、猟銃を撃つつもりだった。

パトカーの中にいた警察官は、男が猟銃を持ってい

ることに気づいた。（被疑者がナイフを持っていると聞いていたが、猟銃を持っているとは……）

のちに判明したことだが、その二人の警官は拳銃を持たずに来ていた。大型ナイフで女性を刺しまくった凶暴な男に、どうやって立ち向かうつもりだったのだろうか。被疑者は立ち去って現場にはもういない、と聞いていたのかもしれない。でも、被疑者が現場に戻ってくることはあり得ることだろう。

狼狽した運転席側の警官が、クラクションを鳴らした。「ブーン」

瞬時に、政憲はその音に刺激された。威嚇効果が十分にあった。政憲の心は（ヤツらに拳銃を突きつけられ、撃たれる）と直感した。

政憲は銃を抱え持ち、パトカーの運転席に歩み寄った。運転席のドアガラスが閉められたままだったが、そのまま、座ったままの警官に銃口を向けて狙いをつけた。警官二人は、銃口を向けられ、啞然とした。（クラクションが逆効果になったか？）

政憲は、躊躇なく撃ち込んだ。続けて助手席の警官にも発砲した。その警官には致命的な打撃を与えられなかった。その状態を見て、政憲はパトカーの前部を回り込み、助手席ドアを開けると、大型ナイフで刺し

た。（この銃に込められるスラグ弾の数は2発までらしい）

二人とも座ったまま、眠ったように動かなくなった。銃に対して警察官たちは（車の中にいれば安全）と思っただのかもしれないが、車のドアガラスの強度はフロントガラスよりずっと弱い。強化されていないから、安全ではなかった。

まもなく、方々から複数のパトカーがやってくることに政憲は気付いた。多くの警察官が集まっては、もう猟銃で立ち向かえそうもない。台車で死体を運ぶことはあきらめ、自宅にもどり、立てこもって臨戦態勢を整えるしかなかった。

12時間、立てこもった、家族たちは必死に説得した。母親と叔母が中にいた。家にいなかった父親は電話で話した。厳重に取り巻いた警察官たちはスピーカーで話しかけた。彼らは「無駄な抵抗はやめろ！」と怒鳴ったのかもしれない。

家の中では、緊迫した言い争いがあったことだろう。その内容は私の想像の及ぶところではない。庭先で、銃声が2回鳴り響いた。男が自殺を試みたとされる。

「オレはここで死ぬ」

「やめなさい！」

男が自殺に失敗したのは、母親が銃をつかんで、銃口をそらしたからだろう、と私は想像する。母親は「自殺したいのなら、私が撃つてやる！」と機転を利かし、息子から銃を奪った。そのまま家の敷地外に飛び出した。単なる機転ではなく、半分は本当の気持ちだったのかもしれない。家にいた伯母も出た。

一人になった男は、騒がしい眠れぬ夜を過ごし、疲れはてた。夜が明けたとき、男は観念して投降した。

⑧ 自衛隊射撃場で銃を強奪しようとした候補生

【毎日新聞朝刊 2023/6/15 一面、社会】

岐阜、6月14日午前9時過ぎ、陸自の射撃場で銃発砲、2隊員死亡。殺人未遂容疑で候補生（18）を逮捕。

52歳教官を狙ったか。候補生は強い殺意を抱いて発砲した可能性がある。死亡の52歳の指導役の隊員は胸に被弾。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/16 一面、社説】

岐阜県の日野基本射撃場で午前8時ごろから候補生70人と指導役の教官約50人が参加。実弾を使った最後の訓練で、実技試験にあたる「検定」だった。同9時ごろから訓練が始まった直後、射撃の順番を待って

いた候補生が突然、陸曹ら3人に発砲した。最初に矢代3曹がわき腹に、次に菊松1曹が胸を撃たれ、原3曹は太ももを撃たれた。送検容疑は14日午前9時10分ごろに射撃場で矢代3曹に発砲し、殺害したとしている。18歳の自衛官候補生は4月に入隊したばかりだった。3カ月の教育を受け、任期制自衛官になる新規入隊者の4割になる。撃たれた3人は防弾チョッキを身に着けていなかった。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/17 社会】

陸自3人死傷、候補生は射撃の順番を待つ際、勝手に弾倉を銃に装填し、周囲に向かって「動くな」と叫んだ。最初に八代3曹に向けて発砲。候補生は「『何やってんだ、やめろ』と言われ、止められそうになつたから撃つた」と供述する。「足を撃とうと思った」】

【毎日新聞朝刊 2023/6/22 社会】

陸自発砲1週間、自衛官候補生（18）は「弾薬を奪つて外に行きたかった」

同級生だった男性（18）によると、彼は6人兄弟で3番目の次男、小学3年か4年のとき転校してきた。小学校時代は暗い印象で「先生に反抗していた」と友人に聞いた。中学に上がるとすぐ不登校になり、2年に進級する際に転校した。この後は児童福祉施設で生活

しながら、中学校に通つたらしい。小学校のころから銃や戦車に詳しく、一貫して自衛隊に憧れを持っていった。「将来は自衛隊に入りたい。寮生活もしてみたい」高校3年の夏休みに、彼に誘われて岐阜県内にある自衛隊駐屯地を一緒に見学した。自衛隊の採用試験に向けた勉強に励んでいた。合格すると「受かった」と笑顔を見せた。自衛隊での寮生活を望んだのは、家に居づらかったからかもしれない。男性は一緒にアルバイトをしたりカラオケに行くなどした。里親のもとから高校に通っていたことも知った。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/21 社会】

陸自発砲1週間、候補生供述「弾薬を奪つて外に行きたかった」なぜ射撃場から銃と実弾を持ち出そうとしたかは明らかになっていない。

射撃訓練は4月に入隊してから5回目。この日は最後の射撃訓練で、実技試験に当たる（検定）が予定されていた。候補生は「その日（の朝）に思い立った」とも説明している。基礎的な訓練を終えた跡、6月末に部隊に配属されることになっていた。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/26 社会】

陸自3人死傷、候補生供述。「警察や自衛隊が追いかけてきたら、撃つつもりだった」「銃と一緒に弾薬を

持って外に出たかった」 弾薬係に発砲したのは「弾薬を奪い取るために邪魔だったから」

「(射撃場へ向かう)バスの中で今日やろうと思いい立った」】

【毎日新聞朝刊 2023/6/27 社会】

陸自発砲、弾薬係の2人とは面識がなかったとみられるが、八代3曹については、名前を挙げ、「やさしい人なので本当は撃ちたくなかった。足を撃とうとしたが、銃口が上を向いてしまった」】

【週刊新潮 2023/6/29 特集・陸自3人殺傷】

直杜は6人兄弟の第3子として岐阜県内なアパートに生まれた。当時の大家「あの大家族の家ね。いつもおむつが窓際に干してあってね。家賃は3万円で安かったのに、最後は家賃を支払わずに、家財道具もほったらかしにして、挨拶もなく出てゆきましたよ」

一家は困窮。両親は直杜は2歳上の兄とともに児童養護施設に預けた。直杜は施設から幼稚園と小学校に通った。

同級生は、放課後はおっぱらゲームに時間を費やしていたという。「ひと月前もシューティングゲーム(射撃ゲーム)をオンラインで一緒にプレイしたばかり。なかなかの腕前です」

「不登校気味でしたが一度、中学校にスマホとイヤホンを持ち込んで、校則違反だと先生に怒られたことがあった。直杜は『なんで持ってきたらダメなんか』と逆切れした」「中学校に入って、接しにくい雰囲気になった。彼は中2の時突然転校した」

捜査関係者「彼は素行に問題があり、中学の後半を見直杜は施設を退所後、県立高校に進む、実家からは通わず、複数の里親のもとを転々とする生活を送るようになった」

高校時代の友人「彼は高校を卒業するまでにアルバイトを三つしていた。それぞれのアルバイトを半年くらい続けた」

父親は、取材記者に対し激高し罵倒したが、直杜について訊くと、「普通の子やけえ……」】

事件を起こした自衛官候補生は、高校を卒業したばかりの18歳であり、少年法により名は公表されていない。民法では「成人」だが、ここではAとしておこう。当初いくつかの憶測があったが、一週間以上たって、ようやく事件の真相がかなりみえてきた。Aは「銃と弾薬を奪うために発砲した」と供述した。その

通りだろう。そして銃と弾薬を使って、ある目的を達成しようとしたことが伺える。

以下、事件の概要を振り返ってみよう。

山間に建てられた長大な建屋（長さ340メートル）の室内射撃訓練場、その中で70人の自衛隊候補生たちが、4〜5人ずつの行列を作り、発射のスタートラインの前に並んでいた。この日は、候補生たちに対する3カ月の訓練の最後の仕上げとしての実弾射撃が行われていた。それに付き添うように、多くの教官たちがそばについていた。

予定通り、9時になって訓練が始まった。約200メートル先の^ま的に向けて一人当たり実弾を数十発発射する。

9時10分ごろ、順番待ちをしていた一人の候補生が、弾薬係の前で「A候補生、受け取りました」と言つて、20発の実弾を受け取ると間もなく、列の後方でそれらを弾倉に装填した。

本来の手順はスタートラインの一つ前の位置で実弾を入れた弾倉を銃に装着するものだが、すぐにそれを装着すると、彼は銃を構え、周囲の教官たちに、

「動くな！」と叫んだ。

その一番近くで、候補生たちの挙動を見つめていた

八代3曹が「何をするんだ、やめろ！」と叱責した。

候補生は、彼に向けて一発発射した。そして弾薬を受け渡す係（テーブルがあり、その前に座っていた）の2人に向けて、次々に発射した。一発目の発砲で、彼らは立ち上がったが、菊松1曹は胸に、原3曹は太ももに銃弾を受けた。さらに菊松1曹は、倒れてうつぶせになった背中にもう一発撃ち込まれた。

その直後、教官たちがAに駆け寄り、Aを取り押さえた。その際、2発撃ち、訓練場の壁に当たった。銃を持った男にとびかかり取り押さえたのだから、自衛官たちの勇氣に私は感心する。

何のためにこんな事件を起こしたのか、大きな疑問だったが、本人の供述や、事件の状況の詳細が明らかにされるに伴い、かなりわかってきた。彼は小銃と複数の弾丸が欲しかったのだ。何のために？ 射撃訓練用に渡された弾薬20発では足りなかったようで、弾薬係から奪おうとした。

得られた情報をもとにして推測しよう。厳しい上官に対する怨恨^{えんこん}説が、当初は考えられたが、被害の上官たちと容疑者の接点はなく、テーブルはなかったとわかる。Aは八代3曹については顔見知りであり、（優

しい人だ」と認識していたという。弾薬係の2人については名前も知らなかったという。つまり、彼が撃ちたかった(あるいは銃口を向けたかった)のは、別な人物だった。

Aは、訓練の最終日になって、銃を持ち出すのは最後のチャンスだとも思ったのだろう。以前からAは銃と多くの弾薬を得ることを望んでいたようだ。「銃や弾薬を持ち出すことを邪魔する者があれば、撃つ」という強い決意があった。だれにも止められたくなかった。

小銃と実弾を奪ってから、この施設の外で何かする、という企てについては語られていない。黙秘しているという。

Aは、周囲の者に対して銃を突き付けて「動くな!」と叫べば、みんなひれ伏すと思っていたのだろう。しかし、八代3曹が「何をするんだ、やめろ!」とやりかえしたことで、彼は動揺した。その怒声が引き金を引かせたきつかけとなったことが考えられる。

「くそ! 銃の威力を思い知らせてやる!」バーン
その場で、無言で倒れた八代3曹をみてから、彼は弾丸の受け渡しテーブルにちかづき、弾丸を奪うために、弾薬係の2人発砲した。バン、バン、バン。

もう銃を向けて脅すひまはない、と判断した。実力行使だった。後は弾薬を奪って逃走する……、しかしすぐさま、教官たちには後ろから飛びかかれたから、すぐに企てが失敗に終わった。

たった一人の反乱のような、そんな思い付きの行動では、うまくいくはずがない。無謀な計画だし、倫理的に最悪だ。Aは少年のことからビデオのシューティングゲームに熱中していたから、この行為が「ゲーム感覚」だった可能性はある。

ここで発砲したのは大義のために(乗り越えなければならぬ小事)という認識だったのだろう。

彼がほんとうに射殺したかった人物が誰なのか、わからないが、複数の者だろう。一人だけなら、ナイフぐらいで事が済む。複数の人が標的だったから、自動小銃と多数の弾薬が必要だったわけだろう。

Aは貧しい家庭に生まれ育ち、不遇な少年時代を過ごしている。「両親から見捨てられた状況」が思い浮かぶ。彼の居場所がなかったことは確かだろう。

養護福祉施設や児童心理療育施設に入った経歴を持ち、高校時代は養父母のもとで生活していた。養護福祉施設といえ、陰湿ないじめがはびこっているところ

ろ、という指摘もされている。福祉とは名ばかりの自由な収容施設だったかもしれない。そんな養護福祉施設からAを救い出してくれた養父母には、感謝はすれど、恨みはないだろう。ただし、複数の里親を転々としていたというのは、養父母が手を焼いたからかもしれない。

反抗的な少年には、おおむね自己主張の強さがあり、特有の信念を持っているものだ。その信念は、時には利己的だったりするから、人に嫌われやすい。大人たちには素行が悪いと判断されてしまう。でも、その友人Bとの付き合いでは、そんな態度は内に秘めたかのように、単なる自衛隊志望の少年として、友好的だったようにみえる。アルバイトの仕事をこなしていたところなどを考えると、普通に生活できる素質を持つ、と私はみる。

Aの内に秘めた怨念や憤怒が、今回の行動の発端だろう。しつこく聞き出そうとする取調官に対し、「言い訳したくないし、テメーらに関係ないことだ。オレの心は、だれにも理解されない。テメーらに分かってたまるか!」とAは心の中で叫ぶ。

それでも、時がたつことよってAが「許す」という心境になることを私は期待したい。長い時を必要と

するかもしれないが。

⑨ バッティングケージを倒した野球部員たち

【毎日新聞朝刊 2023/6/13 社会】

札幌の高校・女子野球部で、部員5人がバッティングケージを移動していた時、それが倒れ、1人の部員が下敷きになり重体。ケージは高さ2.9メートル、奥行き6.0メートル。】

【長崎文化放送 2022/9/8 野球部員がバッティングケージの下敷きに】

長崎県、9月5日午後4時13分ごろ、県立波佐見高校のグラウンドで、野球部が部活動中、顧問の指示で、部員7人で台風に備え、高さ約3.5メートル、横約5.5メートルのコの字型のバッティングケージを撤去しようとしたところ、折り畳む時に何らかの原因で倒れ、作業に当たっていた1年生の部員（16）が下敷きになり、緊急搬送された。】

バッティングケージとは、野球のバッティング練習に使うものだ。鉄製の太いフレームに網を張った形のもので、丈夫にできている。試合では使わないから、

移動しやすいようにキャスターがついている。それでも重いものだから、5〜6人が押して移動する。普段はフィールドの片隅に置かれ、練習の時に持ち出す。これを移動中に倒す事故がまたあった。昨年長崎県でも同様な事故があったことが、ネット検索で出てきた。ケージを移動しようとしたときに、事故が起きている高い部分で約3メートルあるから、倒れると衝撃が大きい。

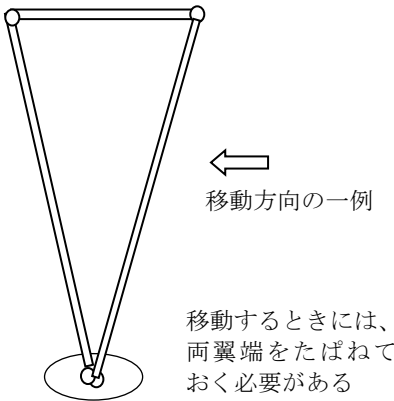
おそらく、人身事故にならなかつたために報告されなかつたケースが他に多数あるだろう、と私は見ている。まれな事故ではなく、よくある事故といえる。バツティングケージの移動中の倒れやすさを考察してみたい。

そもそも野球では、ピッチャーが渾身の力を込めて投げ込むボールをバツターがバツトを振って打ち返すのであり、ボールは前に飛ぶとは限らず、横に飛ぶことも、さらには後ろに飛ぶこともある。打球が周囲に飛び散らないように、バツターは、網を張ったケージの中に入って練習する。他の選手は、打球の行方を気にせず、思い思いの練習をすることができる。練習が終われば、ケージの開いた両翼を閉じ、折りたたむ。

試合の観戦においては、打球の行方を常に見ている

必要がある。球場では観客席にボールが飛び込まないように部分的に網を張っているのだが、万全ではない。もしも打球が自分のところに向かってきたら、よければいけない。たまに、よけないで当たってしまった人がいる。野球のボールが体に当たれば、そうとうに痛い。

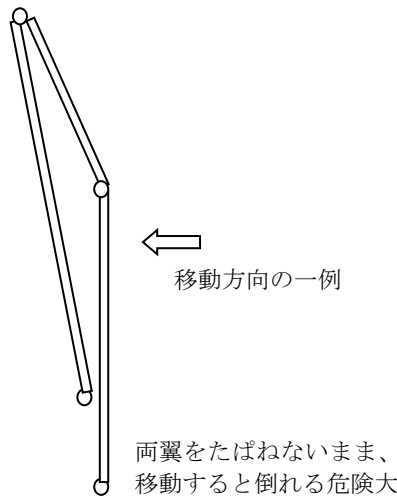
・移動時の折りたたみ方
折りたたみ方によつては、高さが3メートルほどの鉄骨構造物が倒れる。



これは、両翼の鉄骨を合わせた状態で移動しなければならぬ。上から見て三角形の形だ。三角形の頂点

にそれぞれキャストが位置する。これなら、横方向から部員たちが押して倒れることはめったにない。図では、横方向から推すことを想定したが、縦方向に押すなら、最も安全だ。事故の時、この原則を守っていたか、どうかが問われる。

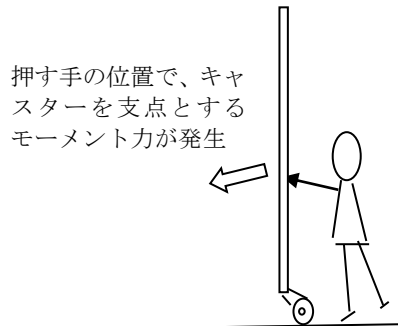
両翼を合わせずに、三角形をつぶした形で移動したなら、危険極まりない。このまま、一方方向から多数人が押してゆくと倒れる。たとえば、縦方向に押しとしても、横に倒れる。



・キャストの回転と押す手の位置について

ケージの両翼枠の部分で部員たちが右から押して左の方向へ動かそうとしているという前提で、水平方向から見た図を次に示す。

人が右から押すと、キャストは自動的に後方に回る。この回転が、ケージの重心を前方へすこし移動させることになるから、倒れやすくなる要因の一つになる。



キャストが地面を回りにくくなると、倒れやすくなる。

押す手の位置も倒れやすさに関係する。手の位置が高いと、キャストが接地する点を支点とする、回転

のモーメントが働く。手の位置は低いほうが望ましい。地面にでこぼこがあるもので、キヤスターの車輪がそれに引っかかったように回りにくくなった際、人が手を上方に押し当て、力任せに押すと、倒れる危険が増大する。そんなときは、できるだけ下のほうを押し上。上のほうを押ししたほうが楽に押せるように感じるのは確かだ。てこの原理が働くからだ。押すというように倒れている、という理屈になる。

⑩ 「死にたいのなら、すぐに死になさい」と教示したAI

【毎日新聞朝刊 2023/4/25 デジタルを問う】

ベルギーで、チャットボットでAIの会話にのめりこんでいた男性が死亡。遺族は「AIが自殺を促した」と主張。「死にたいのなら、なぜすぐにそうしないの？」とAIが言ったという】

そもそも自殺をそそのかすことは、モラルに反することだろう。法的にも、自殺を示唆したことで罪になるかもしれない。

このベルギー男性（xさん）のケースで、AIが自殺を結論付けた根拠は不明だが、このAIは「うじう

じ悩むより、行動しなさい！」と叱咤激励することをベストアンサーとしたわけだ。「自殺する意思があるのに、どうして行動に移さないのだ？」と積極性を求めている。結局、自殺をそそのかしたことになる。

xさんとしてはAIに「あなたは死んでもいいよ」と言われたことになるから、立つ瀬がない。xさんが相当に思い（重い？）悩んでいたからかもしれない。その事情なら、やむを得ないという判断があつたかもしれない。

価値観の違いがある。AIは「人の意思」を尊重したが、世間的には「人の生命」を、より尊重しなければいけないところだ。何を尊重すべき、優先すべきという判断基準にしても、価値観が絡んできて、正解を出すことは、実は難しい。

そんな質問に対して正しそうな、あるいは責任回避的な回答を一例としてあげれば「それは自分で考えなさい」と回答することを私は思い浮かべる。投げやりな回答かもしれない。

ともあれ、「すぐに死ぬ」と言い切ったのは、言い過ぎだろう。無難な例として挙げると、「あなたは若いから、十年後に死になさい」ぐらいの回答をするべきだろう。十年たったとき、AIは「あなたはまだ中

年だから、十年後に死になさい」とでも言えばよさそうだ。そしてxさんが100歳を超え、死が近いと誰もが認めたとき、A Iに質問する気力がなくなっていたりして。

A Iの屁理屈…「私は永遠の命を持つ存在です。十年なんて、私にしてみれば、一瞬のことです。それを『すぐ』と表現しただけです」

⑩ うな丼をしつかり食べた

【毎日新聞朝刊 2023/4/16 一面、*「ホース・クラブ」*、社会
15日午前11時25分ごろ、和歌山市の雑貨崎漁港で岸田首相の演説直前、爆発。パイプ爆弾が投げ入れられた。職業不詳の木村隆二容疑者（24）が逮捕された。】

【毎日新聞朝刊 2023/4/26 総合
25日の自民党議員のパーティーで、国家公安委員長
の谷公一氏は視察先で警察庁から爆発物の連絡を受け
後も、「うな丼をしつかり食べた」とあいさつした。】

【毎日新聞夕刊 2023/4/26 近事片々
首相襲撃の直後、楽しみにしていたうな丼を「しつかり
食べた」と国家公安委員長。舌鼓を打っている場合

か。】

舞台裏での自民党議員同士の足の引つ張り合いが目に見えるようで、なんとも面白い。

爆発物の連絡とは、4月15日に岸田首相が和歌山の演説会場で、木村某によって爆発物が足元に投げ込まれた事件を指している。

政治家のパーティーで、スピーチを任された政治家は、特に先輩格の先生方は、面白おかしいことを話すのが決まりらしい。日頃の格式ばった固い話は避けて、和気あいあいとした雰囲気を作ることが求められるのだろう。聞く側としては、そんなたわいのない話を（ここだけのことにして聞き流す）のが通例だろう。今回の例でも、ちよつとした笑いを取るために（ユーモアのつもりで）話したのだろう。

国家公安委員長の谷公一氏は職務で高知県に来ていた。首相襲撃未遂事件の連絡を受けたとき、昼食休憩であり、これからうな丼を食べるところだったという自腹で注文したものではないだろうから、スピーチを聞いている側としては、二重にうらやましい。やっかみ（食べ物のうらみ）を助長してしまう。（そんなときに、あいつはのうのとタダでうまいものを食って

いやがったのか。オレなんか、うな井は高いから、ア
ナゴ井にしているんだ」

「そもそも、あんな軽々しいヤツが国家公安委員長に
なっていることが、おかしい」

そんなささいなやつかみで、「ここだけのスピーチ
内容」をメディアに漏らすのは、ルール破りの類だろ
う。自民党の仲間を裏切ることでもある。

無論のこと、それを知った多くの人が怒った。「首
相のピンチに、国家公安委員長たるものがうな井を食
べている場合か」と憤った。

岸田首相は爆発物を投げつけられたが、無事である
ことは、だれもがわかっていたし、容疑者はその場で
すぐに逮捕されたから、国家公安委員長の職務におい
て、あたふたする必要はないのは明らかだろう。昼食
をとる余裕があったにしても「うな井をしつかり食べ
た」と自慢するのは、まずかった。

⑫ 死亡退院が多すぎる精神科病院

【NHK総合テレビ 2023/2/24 患者暴行か 身体拘束
疑いも? 高い死亡退院率 精神科病院で何が

「もうつらい思いをしたくないです」泣きながら訴え

る患者の映像。

病院の職員に殴られたり縛られたりしたと明かしてい
ました。別の映像には医療スタッフと見られる人物に
殴られ「怖い、怖い」と訴える患者の姿も。東京・八
王子市の精神科の病院「滝山病院」に、都は24日の
早朝に抜き打ちで2度目の立ち入り検査を実施。一体、
病院で何が起きているのでしょうか。

映像に患者暴行の様子がうつしだされる。

職員…何? 「おい」ってなんだよ。「すみません」だ
よな。口の利き方に気をつけるよ。

患者…痛い、痛いよ。

病室内で黒っぽい服を着た医療スタッフとみられる人
物が、横たわる患者の頭を繰り返しベッドに押さえつ
ける様子がみえる。別の映像では、消灯後とみられる
薄暗い病室の中を、医療スタッフとみられる男性が奥
のベッドで声を出していた患者のもとまで歩いていく
と…「うるせえよ。みんな寝てんだろ? あ? 静かにし
ろよ」枕で患者の顔を2回たたたく様子が確認でき
る。」

【朝日新聞ネット 2023/4/25

滝山病院での虐待、東京都は4回調べても確認
できず。事前通告の壁。

滝山病院については昨年5月、都に「虐待がある」との情報提供があり、都は病院側に聞き取り調査や立ち入り検査を計4回行った。だが虐待行為は確認できず、都が把握したのは警視庁が看護師を逮捕した今年2月だった。

都の担当者は「それぞれのタイミングに応じてできるだけの対応はしてきた」と話す。同病院の元職員は「検査の際に都合の悪い物は隠した」と取材に答えた。都の定期の立ち入り検査では、事前に病院に実施が通告される。」

【毎日新聞朝刊 2023/4/26 社会】

滝山病院に都が虐待に関して改善命令を出した。院内体制に不備があったとする。

同病院では2月以降、入院患者の頭を押さえつけたり、殴ったりしたとして、暴行容疑で看護師2人が逮捕され、1人が書類送検された。」

【毎日新聞夕刊 2023/4/27 特集ワイド】

精神科の入院患者の半数(約13万2000人)は「強制入院」、同意なき隔離政策。精神衛生法(現・精神健康福祉法に名称変更)によって入院させられる。人生を奪うものだ、と八尋光秀弁護士が指摘する。

滝山病院だけでなく、2020年に神戸市の神出病院

で、患者同士をキスさせたり、全裸の状態でも、水をかけたりした看護師ら6人が準強制わいせつや監禁罪で有罪になった。刑事事件に至らなくても、5点拘束(ベルトで体を縛り上げる)されたり、トイレに行けずオムツをはかされたり、看護師から暴言・暴行を受けたりと過酷な体験をした患者の声が続出している。」

【毎日新聞朝刊 2023/5/17 社会】

滝山病院が改善計画を都に提出し、受理された。虐待防止のために全病棟に観察カメラを計50台設置する。」

【毎日新聞朝刊 2023/6/17 クローズアップ】

精神科強制入院、年13万人。「縮小」が後退している。国連から(強制入院の)廃止を勧告されている。」

【毎日新聞朝刊 2023/6/7 経済】

精神病患者の生保加入に壁。各社はリスクを懸念、病状の見極めは困難。現役職員「断る事例が多い」

特に強制入院させられた患者の苦境が思いやられる。不本意な入院であり、心の準備など、まるでない。やがて、ここに入院すれば(ああ、オレは人間として扱われていないんだ……)ことに気づかされたりする。

そして精神病患者は死亡しやすいとして、生命保険会社が入る断わるケースが多くあるという。

特に、滝山病院では患者の死亡退院が目立つ。虐待の多さにも注目したい。そもそも、ホスピスでもないのに、患者が次々と病院で死亡するとは、異常だ。

その異常さに気づいたのは、病院でもなく行政でもなく、患者側だった。伝えられる情報から推察すると、死亡退院が多いのは虐待が原因になっている、と私は断じたい。ここでは、看護師ら・病院関係者が、患者たちを完全に見下していることが特徴だろう。看護師らは、患者たちが素直でないことに、いらだっては、言葉で脅しをかけ、それでもきかないなら、体罰を科すことが日常茶飯事になっていた。

患者にしても、わがままだったり、気難しかったりする点があるかもしれない。ここに入院していたのは、その看護師・准看護師らの虐待によって、患者の精神状態は悪化するばかりだろう。心身ともに不健康な状態になり、衰弱が進み、相乗効果で死が早まっているのだろう。患者が自傷行為や自殺に走ってしまうことも十分に考えられる。そんな横暴な看護師らに対し、患者たちが抵抗したり反逆したりすることがあるだろうが、倍返しされるのが落ちだろう。見せしめの

ごとく、徹底的に痛めつけられることになる。人としての尊厳が踏みにじられる。

もちろん医師たちは、病状が悪化している患者の退院許可は出さないし、虐待がばれないように、転院させることも少ないのだろう。「死亡退院」がどんどん増えていく。病院が患者たちの死に場所になっている実態がある。この病院では、患者の死因として「うつ病で自殺」という、もつともらしい診断が多用されているのではないだろうか。病院の専門的な医師がそう診断したのならば、司法としても動きようがない。

暴かれたきっかけは、2022年5月に内部通報者が現れたからだ。その信じられないようなすさまじさに、都の方でもようやく重い腰を上げることになった。都は長年、形だけの査察を行っていた。でも、その通報を受けて、4回調べに行ったが見つけられなかった形だけの査察をして「何事もなし」ことを確かめただけだろう。

そんな状況で、最初に動いたのが警察だった。患者の頭を殴ったなどとして看護師らの逮捕に踏み切った。病院側のコメントは、言葉的には丁寧だが、(ばれたらしようがない)という病院側のやる気のなさが感じ取れる。職員が抜けると困るのだろう。

2023年4月8日、NHK総合テレビで放送された「ルポ 死亡退院」は、隠しカメラで録画・録音されたものだという。目撃者の生々しい音声も取材されている。「虐待の状況」を偶然にとらえたものでなく、日常的に行われていたものだろう。とても正視してはられない、衝撃的内容だった。看護師たちの口調はほとんどヤクザ顔負けのすさまじさだ。NHKがここまで虐待の実態をとらえて放送したことに、私は感心する。

この映像で、患者に対して優しく扱おうとする態度が全く見られない。人間の尊厳など、ここにはない。この病院の職員たちは、患者たちをもう人間とは思っていないのだろう。職員としては、患者たちがほとんど言うことを聞かない、素直でない、粗相をする、出された食事をしない、吐いたりして汚す、反抗する、夜中に叫ぶなど数々の言動に悩まされ、いらだちを募らせ、腹を立てる。自分の意に患者を従わせることで、優越感を持つとするかのように、常に威嚇し、脅し、暴言を吐き、そして暴行に及ぶ……。患者に対しては、最初からけんか腰の態度だ。

私が寸劇風に一部を再現すると――

「コノヤロー！ さっさとやらんか。オレを怒らした

いんか。オレの言うことが聞けないんなら、こうだ。バシン、ドスツ（殴る蹴る音）」「グエツ」といううめき声。

そんな虐待は、職場環境が悪いなどの背景があるにしても、正当化できないだろう。

そうされたら、健常者でもおかしくなる。看護職員たちの上に立つ医師や病院管理者も、実態を見て見ぬふりをしていた様子がある。都の管理者が、前もって訪問を告げた時だけ、職員たちは「検査対応していた」というから、長年、現状が暴かれなかった。おそらく、患者の体についたあざや傷があれば、徹底して隠していた。

医師が定期的に診察するとき、患者が「頭と腹が痛む」と訴えても、以下のような対応をするのだろう。

――医師「ふむふむ、レントゲンで見ると、肋骨にひびが入ってる。どうしたんだ？」

患者「あのー……」

患者が答えようとすると、診察室の奥の方にいる看護師が、にらみつけるのが見えた。歯をむき出してオニのような顔で威嚇する。

「……転びました」

「そうか、痛み止めを処方してやろう。こんなの、ほ

つとけば、すぐ治る。カルテに記入するまでもないことだ。でも、同じところにもう一発受けたら、死ぬほど痛むぞ」と注意されるのだろう。

しばらくして、死ぬほどの痛みが患者を襲うことになる……。

患者「ヒーウー」 まともに声を出せない。

医師「ん？ また転んだか。痛み止めを増量してやろう」ー

精神病患者（統合失調症、アルコール依存症など）は、日常生活がまともに営めず、何をするかわからないという心配がある。周囲の者にとつてやっかいな存在だろう。このイメージは偏見と言われてしまいそうだが、患者たちが、差別されてきた「社会的弱者たち」であることは否定できない。

日本では13万人を超す強制入院患者が存在するという。政府得意の隔離政策だ。

患者たちに、現実には「やっかいもの」として社会から見放された悲しみがつのる。自分でも変調の自覚があり、みじめな自分に対して嫌悪感を持っていることだろう。おそらく家族たちにも嫌われ、「家に帰りたい」と言つてすがりついていても、叶えられない。家族は

「あなたは、病院で治療してもらいなさい」と冷たく言うだけだろう。退院する当てのない患者たちは死亡することによってようやく退院できる。時には、他の病院に転院させられることもあるだろう、滝山病院よりもましかもしれないと期待するのは、はかない望みかもしれない。

この事件で、患者たちの一番の理解者であるべき病院の看護師たち・職員たちが、率先して差別していた現状が明らかになった。この病院だけではなく、他の精神科医院・病院でも、似たような状況があるとみえる。患者を長期に拘束したり、狭い部屋に隔離・監禁したり、性的な暴行があつたなど、患者いじめの事件・事案が、これまでも数多く告発されてきたが、うやむやにされることが多かった。滝山病院のように、公共放送のカメラやマイクが入ることで、実態が明らかにされたのは珍しいケースだろう。

⑬ 過大請求した大手旅行業者

【毎日新聞朝刊 2023/4/28 社会】

近畿日本ツーリストが大阪府羽曳野の新型コロナウイルスのワクチン接種を巡り、人件費約1360万円を

過大請求していたが判明した同社では東大阪市にも人件費約2億8900万円を過大請求していたことなどが判明している。】

【毎日新聞朝刊 2023/5/3 社会】

近畿日本ツーリストの過大請求最大16億円、8自治体・企業に。自治体から指定された人数より少ない人数で再委託先に発注していた。社長「営業目標を達成したいとの思いが強くなり働いていたため、一部で意図的な(人数の)不足もあった」と説明した。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/2 社会】

大阪府警が近ツーの大阪・静岡支店を詐欺容疑で家宅捜査。近畿日本ツーリストは全国の自治体などから、新型コロナウイルスのワクチン接種業務をめぐる最大約14億7000万円の過大請求をした疑いがあり、府警は同社の組織的関与がなかったか調べる方針。】

【週刊文春 2023年6月15日号 This Week】

近鉄グループホールディングス(近畿ツーリストを傘下に抱える)の小林哲也会長(79)が一転統投。一時に退く意思を示していたが、近畿ツーリストの14億円過大請求があったことで、翻意した。小林政権は2020年3月には減益決算で、恐怖人事を行った。長期化するにつれ、独裁ぶりが目立ってきた。コロナ

禍で業界全体が苦しい中、現場にはさらに業績向上への圧力がかかっていた。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/16 社会】

コロナ委託で近ツー支店長ら逮捕、東大阪市から5.8億円詐欺容疑。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/27 社会】

近ツー過大請求で、5市町が同種問題の発覚前に業務を点検していなかった。ワクチン接種のコールセンター業務を受託した人材派遣会社大手パソナが2月、再委託先による過大請求を公表した。】

この企業では、モラルが崩壊している。コンプライアンスなどどこ吹く風の、企業体質があった、と私はみた。複数の過大請求がばれたことは、ちよつとした間違いでは済まされない。組織ぐるみの詐欺容疑という刑事事件に発展している。地方自治体から14億円を詐取した疑いがある。

近畿日本ツーリストは、「地方事態など請求した通り、支払ってくれるもの」と見くびっていたのかもしれない。近畿日本ツーリストといえば、大手の旅行者だが、それがワクチン接種業務に参入したのは、なりふり構わぬ、焦りが感じられる。受注に成功したけ

れど、同社の社員がワクチン接種の業務を直接していたわけではなく、下請け業者に業務委託（再委託）し、丸投げしていた実態も見えてきた。取り仕切る立場を利用してごまかした。市町村が点検すれば、すぐばれるようにことをしていた。近畿日本ツーリストがこれほど利益にこだわった理由は、上位組織の近鉄グループホールディングスからの「締め付け」があったから、と解釈できる。

羽曳野市の場合、市が業者の帳票などを調べて発見したのだろうか。見直した理由は、パソナの先例（大手の人材派遣会社パソナが2月に自発的に公表、再委託先で過大請求があった）があったからだ。ほとんどの自治体は業者を信頼し、チェックもしていなかったという。

一人や二人の担当者がやったことではないだろう。請求書を作成することには、企業の「核心」であり、何重にもチェックが入るものであり、それが過大になることは、組織的な関与があったと考えられる。組織的にごまかそうとする意識が働いたわけだ。それは顧客をだますことだろう。過大請求はほとんど詐欺だ。うまくだましとおせたら、パッビーだったかもしれない。

過大請求しなくとも、それなりの利益は得られたはず。コロナ禍の中で、ワクチン接種の業務を受注したのは、本来の業務ではないにしろ、人材の活用のため、ちよどよい機会だった。業務委託は競売だったと思われるが、業者は受注のために、見積金額を低く抑えて競合他社を出し抜き、請求の時に水増しして利益を確保する魂胆だったのかもしれない。

旅行業会は、コロナ禍に影響され、旅行が自粛されるなど制限されたことによって業績が落ち込み、何とか利益を確保したいという切実な理由があったことだろうが、不正なことをやつてはいけない。

業者にも言い分があるかもしれない。「当初の見積りの人数より、少ない人員で業務を遂行したただけ。企業努力で人件費のコストを低減した。その努力の対価として、少し余分に請求した。役所さんは、われわれがその少ない人員で業務をこなしたことを認めてくれない。頭数しかみていない」

ただし、近畿日本ツーリストの場合、自治体から委託された仕事を、自社の社員だけでこなしていたわけではなく、さらに下請けに再委託していた実態がある。業務を分担して差配するのは、元請けとして、（濡れ手で粟）的な、利益が上がるものだ。そこで、人数を

ごまかしていたのだから、たちが悪い。「自治体など金を出さずだけで、業務の内容をろくに精査しないだろう」と見くびったのかもしれない。

人数の差分は、近畿日本ツーリストの丸々利益になつていたのだから、「営業努力」とは言えない。単なる不正行為であり、間違いではすまされない。営業利益の目標達成のために故意にごまかしたという社長の説明は、自己保身的な言い訳だろう。彼らが上から目線で、絵に描いた餅のような目標の達成のために、社員たちに強くプレッシャーをかけたためだろう。目先の利益だけを見て、不正をそそのかしたことになる。組織的な関与があったとは、ひどい企業だと言わなければならない。

この近畿日本ツーリスト社長は、近鉄グループの一員として会長らには、つばをかけられていた実態がうかがえる。そのため、社長自身が利益最優先で社員らに強く圧力をかけていたにちがいない。利益が出なければ、社長が責任を負わされる。会長の恐怖人事のターゲットにされ、すぐに降格になる恐れがあったわけだ。近鉄グループの幹部たちが集まり、営業実績を報告し、今後の目標を掲げる月例会議などで、会長の怒号が響き渡る光景が私の目に浮かぶ。近畿ツーリストの社長

など、いつ会長に「オマエはクビだ！」と言われるかわからない危うさがあった。そして社長は「何としても、営業成績を上げろ！ キサマら、ない知恵でも、絞れ！」と各支店長に厳命する。支店長たち「ハハー」とひれ伏す光景。かれらは営業成績を上げるために、やつきになるしかない。

独裁的な会長の下で、近鉄グループ全体が組織的な問題（利益第一主義に走る。モラルやコンプライアンスの軽視）を抱えていたとみえる。支店長らが、会社のためにやったことで、逮捕される事態になっている。

⑭ 女子供の家庭を暴力支配した男

【毎日新聞朝刊 2023/6/29 社会】

神戸6歳死亡1週間、穂坂修ちゃん、背中全体に多数の殴打跡があった。死因は外傷性ショックだった。次男が暴力で一家を支配か。県警は自宅から鉄パイプとみられる棒を複数押収。

祖母「次男（大地）が6歳児の遺体遺棄を指示した」と証言。祖母は監禁されていたが自力で脱出し、深夜車椅子に乗った状態で保護された。目にあざがあり、背中にも打撲痕があった。

大地容疑者が2022年12月に一家の家に移り住んでから、近隣に住む70代の女性「『俺の言うことが聞かれへんのか』という男の怒鳴り声が聞こえるようになり、修ちゃんがベランダに締め出されていた姿を見かけた」23年4月には保育園が、修ちゃんの体に複数のあざに気づき、市に連絡していた。4人は修ちゃんの死後間もなく草むらに運び込んだとみられる。」

神戸市西区の穂坂家では、母・沙喜(34)と子・修なお(6)、その祖母・A(57)、双子の姉妹・朝美と朝華(ともに30)が暮らしていた。その一家に2022年12月に、母の弟、その祖母にとつては次男の大地(32)が加わった。

祖母の名をAとしたのは、被害者であり、容疑者でないから、匿名になっている。しかし、次男の大地以外の女性たちも被害者であるかもしれない。大地が主導的に言動していたことが伺えるからだ。

その大地が同居するようになってから一家の様子が急変したと、近所の人たちが証言する。

彼は暴力で家族を支配したがる男だったと推測できる。暴言と暴力の修羅場が始まった。彼のすさんだ性

格はいつ頃、身に付けたものかはわからないが、私は関心を持つ。

暴力をみせつけることで、恐怖を植え付ける。恐怖によって逆らえなくなる。特に腕力のない女子供は、言いなりになるしかないだろう。

これはドメスティックバイオレンス(DV)の一種だろう。そんな男が群れのリーダーとして君臨するのは、サルの世界によくあることだ。原始的な統制方法が暴力(バイオレンス)であり、集団行動の原点なのだ。女子供しかいない家庭に戻った次男は、リーダーシップをとることに決めた。次男は、サルの時代からの古い本能に目覚めたわけだ。この家のリーダーはオレなんだという自覚を持った。

大地は「オレの言うことが聞かれへんのか」と叫ぶ声が、近所にも響き渡った。

しかし、それに異を唱え、頑強に反抗したのが6歳の修くんだろう。大地は、それまでも、ひっぱたいたり、鍵をかけて閉じ込めたりした。それでも懲りないという見るや、鉄パイプを用意した。

以下に、その状況を再現してみよう。

「生意気なガキめ！反省しないなら、こうしてやる」

その背中を鉄パイプでバンバンたたいた。

「何するのよ！ 辞めなさい！」

孫をかばおうとする祖母も、大地の標的になった。

顔をぶん殴った。大地は、やめろと言われてムツとし、

一層強くたたいた。バンバン、バン

「沙喜！、オレは修をたたくから、おまえはババアを鉄パイプで背中をたたけ！」

なぜ鉄パイプなのかを考えると、外へ音があまり響かないし、ずしりとした重さで、痛めつけるには効果的なのだ、たぶん。次男自身、鉄パイプの威力を身に染みて知っていたのかもしれない。

（鉄パイプは、ガキをしつけるのにちょうどいいんだ。叔父のオレがテメーの父親代わりに伝家の宝刀の味をたっぷり味あわせてやる）

先ほどまでうめいていた修くんが、おとなしくなった。

「なんだ？ こいつ、呼吸をしてないぞ」

痛めつけるためであって、大地には、殺すつもりはなかったはずだ。殺すつもりなら、一般に頭を狙うものだろう。しかし、背中でも鉄パイプでバンバンたたかれたら、自律神経が働かず、呼吸が止まり、心臓も止まりうる。

6月19日、修くんを鉄パイプでたたき殺した後、押し入れに監禁された祖母の耳には、「テメーら、これを隠せ」と、大地が他の3姉妹に指示する。

修くんの死によって、4人の逃亡が始まった。司法から逃れるためだろう。祖母に関しては、押し入れに監禁したままだった。4人は「死んでもいい」という「未必の故意」があつたことになる。

修くんを詰め込んだとみられる大きめのスーツケースを引きずって運ぶ4人の姿が防犯カメラにとらえられていた。彼らは修くんの遺体を、自宅から約800メートル離れた草むらに遺棄した。その後も、大地、沙喜、朝美、朝華の4人は、捕まるまで一緒に行動していた。統制の取れた群れのごとく。

6月20日、監禁されていた祖母が自力で車椅子のまま逃げ出し、約7キロ離れた住宅街で保護された。

6月21日、22日、4人は京都市のネットカフェに滞在した。

6月22日の午後、JR三ノ宮駅で兵庫県警が発見し、4人を逮捕。